会　議　の　名　称	あま市放課後子ども教室のあり方研究会
開　催　日　時	平成３０年８月３０日（木）午後２時３０分から４時３０分まで
開　催　場　所	あま市役所甚目寺庁舎　２階　大会議室
内　　容	１　あいさつ ２　協議事項 （１）委員長・副委員長の選任について （２）放課後子ども教室のあり方について （３）その他
資　　料	次第 あま市放課後子ども教室のあり方研究会委員名簿（資料１） あま市放課後子ども教室のあり方研究会要綱（資料２） 放課後子ども教室と放課後児童クラブとの比較表（資料３） あま市放課後子ども教室の現状（資料４） 放課後子ども総合プラン（資料５） 愛知県放課後子ども教室参考事例集（参考）
公開・非公開の別	公開
傍聴人の人数	２人
出　席　委　員	木全（克）委員、木全（孝）委員、井村委員、林委員、辻委員、川原委員、村上委員、宮崎委員、大西委員、立松委員、鎌倉委員
欠　席　委　員	増田委員、溝口委員
事　　務　　局	村上市長、松永福祉部長、樋口子育て支援課長、平野主幹、井上係長、川村主任

事務局	開会
市長	あいさつ （市長は他の公務があるため退席）
事務局	資料確認 委員紹介及びあいさつ 事務局紹介及びあいさつ 委員長及び副委員長選任 　委員長は民生委員児童委員協議会会長井村委員、副委員長は豊橋創造大学非常勤講師、レクリエーション協会会長の木全（克）委員
井村委員長	あいさつ
事務局	放課後子ども教室のあり方について 　資料を基に放課後子ども教室の概要説明。また当市において実施している美和・甚目寺地区の放課後子ども教室の説明及び実際の運営を動画上映。 　「あま市版」放課後子ども教室モデル事業をまずは七宝地区で実施予定であること、「あま市版」としてどのような形態でできるかというご意見をいただきたい旨を説明。
木全（克）副委員長	美和地区でコーディネーターをさせていただいております木全（克）です。映像を見ていただいたとおりですが、やはり今どこでもこれから５、１０年後いわゆる後継者ではないですがそういったものに手をつけていくということが大事で、我々のスタッフを見ていただきますと特に子どもの教育に携わったというスタッフはほとんどおりません。子どもが大好きだ、それから熱意を持ってというところで携わっていただいております。子どもたちがいわゆる地域の資源、というか人材として、いろんな人がいらっしゃるというところをわずかな時間ですが触れていただく。美和、資料４の方ですね、空手、かみひこうき、マジック、レクリエーションは、体育、文化協会等で活躍されている団体の指導を受ける、そして防災はもう身近な形です。認知症サポーターは、高齢福祉課でいわゆるお年寄りのエリアです。小さいうちから地域の高齢者に触れるというところも含めて体験していただいて

	おります。いろんな人たちを地域で支えていける、そして地域のいろんな人と子どもたちが触れていけるようにやらせていただいていますが、やっぱり若い、元気いっぱいの子どもが学校を終えて、あと２時間おもいっきり暴れられるというふうに来るので、我々スタッフは倒れそうな世代ですので、その戦いでいつも皆さん終わると父兄が帰った後、ため息をついて、「あ、今日も何とか持ったわ」というような感じできています。本当にいろんな方の力を借りて、今事務局からの話にあります美和、甚目寺でスタートしています。七宝でもなるべく地域にあった形で新しいものができて、スタートできるといいかなと思っております。別な形で合併してみんな一緒にいくというような声がありますが、とても難しいことでそれぞれの地域のいわゆるカラーがありますので、そういったものを大事に、一緒にして壊すのではなく、大事にしていくといい形の放課後子ども教室ができるのではないかと思いますし、そのために皆さんのお力をお借りしたいなと思っていますので、どんどん言っていただいてできるところから手をつけて、共にやっていきたいなと思っております。
林委員	美和と甚目寺で結構日数の差がありますが、支援員の関係もあるかと思います。モデルとして考えてみえるのは、皆さんの意見でこれから決まるのかもしれませんが、どこへ焦点を持っていくかによって変わってくるような感じがするのですけど。例えば僕らが２５０日未満で全部やりたいと言ってやれるのかどうかっていうのもあるかと思います。何となくどこへ持っていくのかなっていうのが決まらないという感じもしています。その辺はあくまでみんなで協議してモデルとして作っていきたいということでしょうか。
事務局	モデルとしてやっていきます。林委員が言われましたようにスタッフ的に言いますと、甚目寺が１教室に４名、美和は物作りではさみなど使って非常に危険なところもありますので、６名から８名の方にお願いしております。美和の年１３回という状態でもスタッフがなかなか揃わないというところもございますので、林委員が言われますように、どういった形でやっていくか、その地元にご協力を願った時にそれが何回実施できるのかが決まってくるのかなと思っております。やり方、内容については、いま見比べる対象が２つしかなかったので、子ども教室を実施していく

	にあたって、美和のパターンでいったら何日できるのか、甚目寺のパターンでいったら何日できるのだろうかという考え方もあります。甚目寺でも当然プログラムを組んで、コーディネーターの方もおみえになります。自由遊び、季節の行事、工作等も実施しておりますが、美和の場合は、教室に入って自主学習等をやっているものではございません。木全（克）副委員長が言われましたように、地域の交流そういったことの目的からすると美和のような形でいくことが子ども教室の本来の形であるかなと思いますが、お母さん方にとっては、子どもの安全等を考えた場合に、甚目寺のような給食のある日に預ける場所があるという安心感というものも甚目寺にはあるかと思います。両極端でございますので、今日は第１回の研究会でありますので、美和・甚目寺のやり方を見ていただきました。モデルを七宝で実施していきたいというように事務局としましてはいま考えておりますので、色々な方たちの団体、ボランティアの協力をいただいて実施していけたらなというように思っております。美和のようなプログラムを組むには、何をして、講師の人はどこから呼んでいいのかという色々な問題も出てくるかと思います。そういったことは、事務局と一緒になって考えていき、実施していけるかと思います。最初から地元の方でお願いしますということはありません。ここの研究会で図ったこと、ご意見をいただいたことを七宝に降ろし、事務局がまた七宝学校区の方に降ろさせていただいて、やれる学校区の方たち、どんな方がお見えになりますかというような顔繋ぎだけでも、各会長、委員長さんにしていただけると非常に動きやすいかなというように思っております。ここでご意見をいただいた内容等を七宝の実施する場所の人たちに、お声掛けするのにどういった方たちのご協力がいただけるかというようなこともお聞かせ願えたらなというように思っております。
井村委員長	人数は毎回変わるのですか。
事務局	各小学校定員５０名で募集させていただいております。甚目寺は２０名程度毎日お子さまがおみえになりますが、決まった子というわけではなく日々変わる場合が多いです。美和でも２０名ぐらいかと思います。利用する子はほぼ１から４年生ぐらいの子で、５・６年生になるとあまり利用がないという形になっております。

宮崎委員	七宝地区で去年、放課後子ども教室を作っていただきたいということで、市民の方にアンケートを取りました。８１.２％のアンケート回収率があり、そのうち利用したいと言った人が１５１名、利用しないという人が３５名。そのなかの３５名の人たちは今６年生だからという理由でしたが、実施していただきたいという思いがすごく強く、このなかには甚目寺方式の毎日というのが理想的でした。中身としては老人の方とかいろんな勉強を踏まえた内容も織り込んでいただけると子どもたちの定着にも繋がるのではないかということで、その辺も重視して考えていただきたいと思います。
立松委員	実は美和地区で放課後子ども教室の立ち上げの時から参加させてもらった者として、当時の網掛けみたいなところをお話しさせていただきます。当時放課後児童クラブが３年生まででした。その時に子どもが小学生で自分も仕事をしていましたので、できれば６年生までみてもらいたいというのと、名古屋が今もやっていると思いますが、トワイライトスクールというもので、働いているお母さん、そうじゃない子どもたち分け隔てなく全児童対象にトワイライトスクールというものをやりながら、地域の指導者というか、そういう方たちをところどころ教室という形で体験教室を設けていました。母が折紙をやっていたので、指導を３０分ぐらい、そういう感じでやっており、私はそういうのが理想だなというところでいろんな意見をさせていただいて、地域の団体がどれくらい参加できるかということで、スタート時は月に２回でした。それがいま１回になり、途中は実行委員会スタイルで、委託を受けてやっていました。その頃は完全ボランティアでやっていました。そうこうするうちにまた行政の方に戻り今も継続しているのはすごいことだなと思います。スタート地点では保護者の方にもご協力をいただきたいという考え方でした。支援をする人たちだけではなく、保護者の方も時々お手伝いに来て子どもたちを皆で見ようねと。子どもたちの募集数が５０名で、時には５０名全員来る時もありました。ボランティアなので、支援するサポーターの人がお休みになると見る人が少なく、子どもたちの安全面等、果たして私たち資格も何もないのに大丈夫かなと。本当に今日おっしゃられたように、子どもたちを安全に見ることができたと本当にほっとしました。だから安全面もそうですし、それで

	毎日やるのはすごい負担です。そういうことも考えてどういう形がいいのか、また地域全体で子どもたちを見守るということがどういう形が理想なのかこれからみなさんと議論しなければと思います。実はボランティアセンター運営委員長をさせていただいていますが、NPO 法人ほっとネット・みわで市民活動センターの受託もさせていただいています。いまセンターには地域のボランティア団体、NPO さん等活動団体さんが登録されていますし、ボランティアの登録をされている方もいらっしゃいます。そういった方々もまた地域の子どもたちの支援にあたると昔よりは少し進んだ形の子ども教室のあり方ができるのではと思います。保護者の方も自ら自分の子どもたちを一緒に見ていこうということも必要なのかなと当時感じましたし、やはりどうしても預けっぱなしということが果たしていいことでもないですし、時には自分たち保護者としてもそこに一緒になって自分の子どもも他の子どもたちも見る、そのような形も考えてみてもいいのではと当時は思っていましたし、自分自身も預けながらも携わっていましたので色々な子どもたちと接点を持つことができました。それは自分自身の財産ですし、保護者のみなさんもそういうところで色々な学びをされるのではないかなというふうに思います。
川原委員	さきほどの宮崎委員のアンケートについてですが、地域によってニーズがそれぞれ違うのではないかと思います。同じ七宝でも学区によって違うのでは。児童クラブに入れない子どもたちの受け皿的なものが求められているのか、それとも本当に地域のなかで地域の人たちと交流をして気持ちを育みたいというような大前提だとは思いますが、七宝で一括りにするのではなくそのあたりの違いを調べてみえますか。
宮崎委員	甚目寺と甚目寺南小学校が毎日開催されていますが、人数がすごく多いため、学童が満員になり受け皿的な扱いを確かにその地域の場合はされています。この漏れた方がいま実際に放課後子ども教室を使っているという集計は多分まだされていないかと思いますが、確実にみえると思います。実際に今現時点で、それをなくされたら、甚目寺の人たちすごく困窮しますよね。美和方式にいきなり変えられてしまった場合、就職とかもいろいろ考えなくてはいけなくなるし、生活面とか、それこそ塾に通わせるお金がなくなってしまうとか、いろんな面で困惑が出てくると思うん

	ですね。甚目寺の地域のことも踏まえて考えていただきたいなと思います。
川原委員	本来はもともと違う目的のものですよね。それを受け皿的なものが必要だからということでこちらに乗せていっていいのか、それとも児童クラブがなかなか全員入れないというのはそちらの問題として考えるのかということも今後考える必要があると思います。
大西委員	七宝地区でお話が出ていますけれど、七宝地区に小学校は４つあります。秋竹と宝小学校へ、遠島学区が二手に分かれて学校に通っています。そのため子どもが帰ってきて遊ぶときは一緒に遊んでいます。もしやるとしたら２つの小学校に地域のボランティアが行って教えるといっても２つのところへ同じように行けない訳です。地域の支援者というのは決まっているので分かれてするというのはできない。もしやるとしたら、宝と秋竹小学校合同で子ども教室をしなくてはできないと思います。その辺ももう少し考えていただいて子ども教室をよくしていただきたい。
村上委員	私も甚目寺南小学校へ一度伺ったことがあります。狭い部屋でいっぱいやってらっしゃる。あれでは子どもさんたちにとって影響いいのかなというのが第一印象でした。場所が狭いということもあって子どもさんをみるのは大変だなと私たち年配にとっては子育てから離れていましたので少し無理かなということも思います。そして放課後子ども教室は午後５時ぐらいまでですよね、美和と甚目寺の違いも分かりました。でもいま私の住んでいるところでも小学生の子どもたちが学校から帰ってきて塾通いをされる家庭もあります。しないところのお子さんたちもいっぱいいらっしゃいます。みなさん遊びたいんです。運動をしたいんです。だから美和の体育館でボール投げとかやってらっしゃるのを見て、こういうことをやっていただけるといいなと思いました。遊ぶ場所もないから、道路で遊ぶ。そうすると車と事故になる。みなさん子どもに注意しているけれど親御さん出て来ずほかりっぱなしの家庭もあります。どういうふうに教育していくかということも、ひとつお手伝いということも含めて考えていただきたいと思います。本当に見ててね、いくら注意してもね、その代り叱れば叱るほど「おばさんこんにちは。」とあいさつはしてく

	れますよ。それでコミュニケーションはとれていくんですけれども、「危ないよ。」というと、「はい。」とは言ってますけど。やっぱりご近所に迷惑かけて車にボールをぶつけたりしているので運動場所じゃない、公園が狭い、そこでキャッチボールしてはいけない、ルールがあると思います。だから施設でも、学校でもいいですからお借りしてやっていただき美和の月に１回ですものね。体育館で利用してやってらっしゃるの。ただもう少し幅広くできたらなというふうに思いましたので、よろしくその辺も考えていただいてお願いいたします。
井村委員長	スタッフさんが増えれば全然こちらの方もね。
宮崎委員	ＰＴＡの親御さん、親が出る。自分たちの子どもみてもらって、それで地域の人たちだけではなく、自分たちの子どもたちなので交代で見るとか。
井村委員長	そういう方たちから、声が上がってスタッフになってくださる、協力してくださる方が増えればまた１クラス２クラス増えると思います。みなさんの知恵をたくさんお借りしたいというのが今回一番柱かなと思います。
立松委員	児童クラブは全小学校に設置されていますか。
事務局	されております。
立松委員	そのうえで、子ども教室というのが、甚目寺が２校、美和が４校ということですね。
宮崎委員	子ども教室の方は、働いていなくても。全児童あま市の子どもであれば入れる、登録をすればね。
辻委員	あまスポーツクラブの辻です。あまスポーツクラブでも小学生さん対象にかけっこ教室と、あと今年は学年を分けて走り方講座、夏休みの間に夏休み子どもわくわくクラブを実施しました。どの講座も共通して定員を設けているのですが、ほかの講座と比べて定員が埋まるスピードがすごく早く、お母さんたちはとにかく子どもたちに何かをさせたい、体験をさせたいというアンテナ

	がすごく立っているというのを感じました。私たちのクラブにもたくさんの小学生が参加いただいていますが、どうしてクラブに参加しましたかというようなアンケートを７月頃にとりました。七宝地区の方は１クラスに女の子が手の平で数えるくらいしかいないため、もっと周りの子と関わって学んで欲しいというような目的で参加されている方もみえます。ただクラブのやり方では、学校から帰った後、家に帰って、また集まってもらってということがなかなかしずらいので、今回の放課後子ども教室は、学校で直接出向いて行ってその場でということはすごくいいことですが、七宝という地域を考えたときに、学校単位でやってしまうと学校の中で関わる時間というのは学校のカリュキュラムの中で持たれているので、もう少し幅を広くして、さっき七宝版、あま市版っていうのもおっしゃっていたんですけれども、そういう呼び方も考えていくとすごくいいのかなと思いました。あとは私自身がゆとり教育を受けた、ちょうどゆとり教育を受けてきている世代なんですけど、やっぱりゆとり教育って話をすると悪いイメージもたくさんあるんですが、小さい時点字で絵本を作る体験や、わらしべ長者鍋といって、みんなでお鍋を持って地域の人の家を一軒ずつ回って、「何かください。」０円で鍋を作ろうみたいなことをしたり、みんなで額を寄せ合って一曲音楽を作ろうよとやってみたり等体験をすごくたくさんさせてもらった小中学校時代なんですが、その時の記憶はすごく残っていて、いま自分の職業に活きていると思いますので、そういう体験のできる、実体験ができる子ども教室になるといいなというのを見ていて思いました。
井村委員長	そうですね。そういった経験は子どもの時にしかできないことたくさんありますね。なかなか家庭でもやれない。みんなでね。
林委員	甚目寺で今放課後子ども教室を２つやっていますが、後の２つはどうしてできないのか。この２つの小学校を要望としてあるのではないかという話を聞いた。その辺をやらないというのは、指導員がみえないのか。
宮崎委員	放課後子ども教室という存在を知らない人が多い。同じ甚目寺でも。

林委員	地域によって違うから。
宮崎委員	ない地域の人たちはあきらめている。
井村委員長	あきらめている。ここはないと。そんな感じかもしれない。
林委員	今聞いていると七宝の方はアンケートでも結構要望がありますよね。
宮崎委員	たまたま私は七宝で、自分のところの地域そういえばないのでアンケートを取ろうと思い取った結果です。
林委員	話をしていけば、保護者の方ももしかして。
宮崎委員	毎日できたら、働いているお母さんもみえるから、協力し合ってというのがやっぱり親同士の交流にもなるので。
林委員	それは難しいなと思います。他のお母さんにはやって欲しいけれど、自分は難しい。
村上委員	子どもさん同士仲がいいから。やっぱり交代でもね。夕方には結構出てね、外で会話してらっしゃるから。
林委員	それができるならもちろん一番いいですけどね。
木全（孝）委員	先だって七宝小学校の方へ来られて、事務局の方が何日ぐらい学校使えますかという話がありました。あり方研究会そのものについてもまだ全貌が分からなかったので、最初は戸惑いましたが、結局学校で年間通して開設可能な日数はある程度は言えますので、そこで学校が開放できる日数が決まる、それにむけて協力者の方が何名おるかということが決まる。そうするとそこでまたプログラムが決まって、結局それを保護者に提出するわけですか。こういったプログラムがありますから、どうですか、そんな流れですか。
事務局	そうですね。きちんと年間何回いついつ実施して、こういうことをやりますということが決まって、それを広報ないし、ホーム

	ページ等で周知をさせていただく。募集をかけていくという形になります。
木全（孝）委員	おそらくいろんな学校を回られると思いますから、そこから可能な日数を確認されることが大事かなと思います。結局地域の子は地域で育てるという七宝小学校もコミュニティースクールを導入しまして、地域の方が子どもを育てることによって、やんちゃやっていた子どももその講師の方みえるとあいさつができるようになる。繋がりが小さいころからできるようになるということですごくいい試みだなというふうに思います。問題なのはいま学童の方で、学習を教える時間があるようです。息抜きに放課もある。やっぱりいまこの時期ですから、いろんな特性を持った子どもがいますので、言うことを聞かない、非常に困ってみえる、ましてや先ほど言われたように人数が多いとトラブルになる。だから七宝バージョンというのを打ち出しながら、その中で学習を盛り込むことができたらと思いますが、学習を盛り込むにはそれ相応の方が必要になる。そうなると協力者、講師はどういう人なのか。やっぱり基本は先ほど言ったゲーム、運動等そういったことを体験させながら、いろんな繋がりを持たせることがいいかなというふうには思っていました。一個聞きたかったのは、登録した子どもがその日突然くるわけですか。
事務局	そうです。
木全（孝）委員	あらかじめ誰が来るか分かってなくて、突然来る。
立松委員	分かっています。
事務局	美和、甚目寺も年度ごとになりますので、募集を行い、申し込みをしていただいてから、登録の決定を出させていただきます。もちろん要件のあるお子さんではなくご家庭の判断で子どもさんとお話合いのうえ来ていただくものですから、当日来ていただいて人数を把握となります。
木全（孝）委員	そうするとよくあるのは、親は行かせるつもりだったが、子どもが勝手に遊びたいから帰ってしまい、来なかったがどうなっているのかと学校に電話がかかってくることが学童の場合ある。そ

	の辺の連絡というのは、親と放課後子ども教室とのやり取りになるのか、それとも学校が入ってくるのか。
事務局	保護者の方には、放課後子ども教室というのは、あくまで遊びの場と言いますか、生活の場、要件のあるお子さんをお預かりするところではないので、こちらで出席カードを把握させていただきましたらお預かりさせていただくということでみなさんご理解いただいております。ただもちろん保護者の方がカードを持たすのを忘れましたということで子育て支援課の方にお電話をいただきまして、学校さんの方に子どもさんを今日子ども教室の方へということは実際ございます。帰ってしまう場合は、ご家庭で受け入れていただいています。
木全（孝）委員	そういったトラブルはなかったのですね。
立松委員	ありますよ。あらかじめ電話番号をお聞きしていて、そういう対象のお子さんが来ると聞いていて来なかった子の場合、来てないけどどうですかということは、親御さんの携帯電話にかけていました。
木全（孝）委員	それが学校にくると困ることがある。実際に学童があるので。
立松委員	美和で私がやっていた時はそうでした。
木全（克）副委員長	学校の場所を借りて学校外行事でやっていますので、よほどのことがない限り学校さまには連絡は取らないようにしておりますけども、そういう心配、ようするに迎えが来ないということはわりと最近では例はなかった。
木全（孝）委員	ひとつは先進の美和と甚目寺がやられているわけだから、そういったトラブルがあったら、もちろんそのトラブルを含めた対策をと思います。
林委員	学校から直行だよね。
立松委員	学校内だから。

井村委員長	外へ出ずに、教室のみだから。
木全（孝）委員	全員を揃えたいから、一回外へ出ます。
立松委員	放課後子ども教室に行く子たちを集めます。
林委員	その時しか分からない。親は行ったつもりだけど、帰っちゃった子もいますよね。そこは分からないのでしょ。
立松委員	集めて行くから、学校内で体育館に移動するだけです。美和の場合は外に行ってということはないから。
木全（孝）委員	ただそこに集まった子が、違う自分の通学団で帰ろうとしている。
立松委員	そういうこともあります。そういうときは親御さんに帰りましたと連絡をしていた。私がしていたときは、名簿があったので、親御さんに連絡して来ないからおかしいと聞いていた。
木全（克）副委員長	すみません、少し補足で。木全（孝）委員言われたように七宝でもできたら最高ですが、美和、甚目寺どっちを選ぶかではなくて、七宝パターンを考えていただければいいと思います。私は甚目寺も見ていますが、さきほど村上委員が言われましたが、もうすし詰め状態でかわいそうです。いま学校の空き教室まで開放してやっています。もうひとつ美和でやっているのは体育館が一応原則です。体育館が使えない場合は、家庭科室等を使っていますから、子どもたちが要するに学校で１日授業で持ち込んでいたものをこの２時間、開放的に遊べるぞという気持ちでやってきます。外へ出ないというところで、隣は親の狙いで勉強をやらないかんぞいうことで１枚はねて一生懸命勉強しているわけです。親の狙いとしてやっぱり学習はありますが、子どもたちは午前中どういう学校、授業で自分が発揮できたか分からないですけれど、とにかくこの時間広い体育館で開放的に上下お兄ちゃん、お姉ちゃんたちと一緒に遊べるという気持ちを第一に来ていることは確かです。ここにはあんまり書いてないですけれど、ドッチボールというのがすごく楽しみで、学年越えて、一番元気です。そんなところで体育館で遊ぶというのと、押し込みの中でやっている

	という狙いが少し違います。それから支援者がどれだけできるかということですが、すべてとはいいませんが別の形で地域の高齢者とコミュニティーで接していますけれど、うちの子は地域では世話になってないという親ばかり。極端な言い方ではありますが、子ども会もそうですし、スポーツ少年団もそうです。自分たちが在籍していた時は一生懸命支援するけれども卒業したら終わりです。ボランティアなんかやっている暇はないという現実も直に聞こえてきますし、申し訳ないですけれど今年でお手伝いするのをやめさせていただきますという厳しい声も聞かせていただいています。最終的にどの学校でもできればこんなにいいことはないですけれど、支援する最終的に人なんです。だから３０、４０のバリバリの方を望むっていうのは少し難しいのが現状です。もちろん全てとはいいません。本当にやっていただける方もいる、最終的にさきほど言いましたけれどある程度学習支援だと資格やら実績がないとだめだろう思いますから、どういう人たちをどうやって確保してやっていけるかという七宝スタイルを皆さんの意見で作り上げていけるということが一番大事かなと思います。
林委員	七宝のどこの小学校でやるというのは決まっているのですか。
事務局	七宝４校ございますのでこれからです。 さきほど木全（孝）委員がお話しされましたが、いま全ての小学校を回っております。どのような状況か、可能かどうか調査中であります。
宮崎委員	ＴｒｅｅＲｉｎｇは根っこのある子どもを育てるというのを基本に自分の力で判断できる子ども、そういう大人を育てる概念のもとで設立しました。こういうものをなぜ放課後子ども教室かと言いましたら、働いていない親御さん、あま市に住んでいる子どもさん全対象に、自分力、自分の根っこがある子どもたちを育てていきたいというのが根本にあってのことでした。勉強も確かに大事ですが、勉強は学校でやっていただける、塾もあります。やりたい子はそちらでしてもらい。子どもたちが集まる場、けんかをしてでも、けんかをすれば人間のコミュニケーション能力がつくそういうことも踏まえていろんなことを人間としての元の部分を作っていくことをしていきたい。

井村委員長	強い子ね。子どもの強い子を育てたいのね。
宮崎委員	自分の体験をとおして楽しい思いをしつつそこで掘り下げて自分で考えることをしていきたい。この間虫をとおして、いろんな話を先生から教えていただいて、体験をとおして自分たちがどう考えるか、生き物としてどう考える、命をどう考えるということを勉強しました。そういうことも全体的にやっていけたらいいなと私の希望です。
川原委員	現場について美和はボランティアさんがしていますよね。甚目寺地区は児童クラブと同日に同時で実施。児童クラブの先生が中心になってですか。
事務局	別です。
川原委員	その方たちはボランティアで。
事務局	有償です。
川原委員	美和地区は無償ボランティア。
事務局	有償です。
川原委員	どちらも有償ですか。
事務局	そうです。時間でお願いしております。
川原委員	七宝に関しても、有償ボランティアですか。
事務局	そのように考えております。
川原委員	木全（克）副委員長がおっしゃった、少し若手のボランティアが難しい話と、あと体育館で実施してらっしゃる。体育館ものすごく冷えますよね。すごい寒い中でご高齢の方がボランティアでしていただくのはすごく過酷だなと思ったのですが。

木全（克）副委員長	ほんとに過酷です。みんな倒れそうになってやっています。いま、川原さんから言われましたが、これもう余るぐらい募集チラシ配っています。多分みなさん見てないですけれど、もうどこでもあふれるほどね。
事務局	ほんとにいま木全（克）副委員長が言われましたけれど、チラシをいろんなイベントごとに入れさせていただき、お手伝いいただけないかなということで同封させていただいております。
井村委員長	こうやって育った子どもたちは、どっかから戻ってくるんですよ。お手伝いに、やさしい気持ちを持った子たちが、またスタッフとして戻ってくると私は思っています。どこかでまた絶対に何かのおりに、参加したいなというふうに思って成長してくれるのではないかなと思います。やっぱりいろんな人の手を借りて育つというのはすごくいいことだなと思います。だからこういうところに、参加、どんどんもちろんお母さんたちもね、確かに自分も助けてほしいからなんですが、子どもたちはそこで育てられると強い子になっていきますよ。スタッフを含め色々な方たちの気持ちも全部吸収して育つのではないかなと思います。本当に子どもの成長は、短い間にすごく成長をするので、早いうちに手を差し伸べるのがいま一番いいことだと思います。子どもたちの柔らかい頭のうちに、大人になってからはね、変えれないですね。だから子どものうちに、いろんなことを教えていただくのは、すごくいいことだと思います。いじめに関しても、子どもを亡くしたお母さんが、いろんなところで自分の体験談を子どもたちに話し、子どもたち自身にいじめをやってどんなことになるかというのを考えてもらい、命は大切ということを広めてもらうには、そういう経験を持った方が子どもの前で話をされるのはすごくいいことだと思い何か機会があるごとに学校等で呼んでいただいて、講演をしていただきたいと本当に思っています。命ってほんとにね、子どもたちの持っているゲームの中の命じゃなく、実際にＳＮＳ等、ほんとに最初はきっかけなんて微々たることからほんとに大きなことになってしまうので、そういうことはやっぱりしないで欲しいってことを常に、そういう子どもたちから先に広めていっていただきたいなというふうに私は思っております。本当に言葉は大切で、重みがあり特に体験された方の話は違うと思います。

	子どもたちはすごく力になってくれるし、いい子どもたちを育てていく地域で、育てるというのはすごくいいことだと思い、みなさんと一緒にいい知恵をたくさんいただきながら、まだ１回目ですが、みんなの力で放課後子ども教室を広めていき、全部の学校でやれるというのは希望ですし、みなさんと一緒に協力をしていくと実現できるのではないかなというふうに思っています。あと何かありますか。
事務局	さきほどの宮崎委員が言われましたクラブのことで待機の子がいるから、そういった子が子ども教室へというお話をされたかと思いますが。
宮崎委員	実際に南小学校へアンケートを聞きに行ったときに、児童クラブと放課後子ども教室があるのになぜ放課後子ども教室に入っているのですかと聞きました。学童定員が５０名でしたか。それで入れなかったから放課後子ども教室の方に入りましたと言ってみえました。放課後子ども教室は、今の段階で１７時までで金額も安い。働き方にもよると思いますが。
事務局	市の施策としては、平成２６年に小学校３年生までから６年生に伸びた関係で当初は児童クラブの定員が約５９０名だったものを、今年度も合わせますとほぼ倍、１０６０名伸ばしてきている。児童クラブの方は整備も実施してきた中で、今年について待機はいないような形で支援をしております。そのため待機児童は今年、去年もございません。 ご意見をたくさんいただいて、子どもが元気で遊べるものがいいのではないかというご意見もたくさんいただいておりますので、そういったご意見をいただいた中で、あと一番問題になってくるご協力いただける支援員、木全（孝）委員も言われました学校が何日体育館を使えるのか、空き教室を使えるものなのかこちらで学校と協議いたしまして、２回目の時に学校の状況を説明させていただきます。各団体の皆様に話をし、どのようなことが実施していけるのか、何日実施可能なのかいうのも、団体のなかで、委託を受ければご協力いただけるものなのか協議していただけたらなと思います。いまのやり方ではなく、木全（克）副委員長が言われましたが、新しいやり方で進んでいこうということが、あま市版ですので、たくさんのご意見をいただけたらなと思いま

井村委員長	す。今日いただいたご意見等はまとめさせていただいて、学校の協議、地元に対しての話し合い等の結果をまたご意見等をまとめたものを２回目に出させていただけたらなというように思いますので、お願いいたします。 その他 閉会